

現代文全集
32

社會主義文學集

日本現代文學全集
32

社會主義文學集

講談社

日本現代文學全集

32

社會主義文學集

編 集
伊 藤 整
龜 井 勝 一 郎
中 村 光 夫
平 野 謙
山 本 健 吉



初版 第1刷
昭和38年12月19日
増補改訂版 第1刷
昭和55年5月26日

著 者
福 田 英 子
幸 徳 秋 水
堺 利 彦
石 川 三 郎
大 杉 四 榮
荒 畑 寒 村

發 行 者 野 間 省 一
發 行 所 株式會社 講 談 社

東京都文京區音羽 2-12-21
郵 便 番 號 112
電話東京03 (945) 1111(大代表)
振 替 東 京 8-3930

裝 幀 蟹 江 征 治

印 刷 星野精版印刷株式會社
製 本 和田製本工業株式會社

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします
Printed in Japan

0395-106322-2253 (2)

(文1)

社會主義文學集 目次

卷頭寫眞

福田 英子

妾の半生涯……………五

幸徳秋水

兆民先生……………四

社會主義神髓……………三

東京の木賃宿……………七

桑港より……………三

堺 利彦

堺利彦傳……………101

石川三四郎

浪……………一六九

大杉 榮

自敘傳……………三九

荒畑寒村

艦底……………三六

冬……………三三

夏……………三九

父親……………三五

光を掲ぐる者……………三〇

寒村自傳抄……………三五

作品解說·····	平野謙	四〇五
社會主義文學入門·····	瀨沼茂樹	四二
年譜·····		四〇
參考文獻·····		四三

社會主義文學集

福田英子

妾の半生涯

はしがき

昔はベンヂヤミン、フランクリン自序傳をものして、其子孫の戒めとなせり。操行に高潔にして、業務に勤勉なる斯の人の如きは、眞に尊き龜鑑を後世に遺せしものとこそ言ふべけれ。妾の如き、如何に心の驕れることありとも、いかで得て企つべしと言はんや。

世に罪深き人を問はぶ、妾は實に其隨一ならん、世に愚鈍なる人を求めば、また妾ほどのものはあらざるべし。齡人生の六分に達し、今にして過ぎ來し方を顧みれば、行ひし事として罪惡ならぬはなく、謀慮りし事として誤謬ならぬはなきぞかし。羞惡懺悔、次ぐに苦悶懊惱を以てす、妾が、回顧を充たすものは唯々是のみ、嗚呼實に唯是れのみ也。

懺悔の苦悶、之れを愈すの道は唯己れを改むるより他にはあらじ。されど如何にしてか其己れを改むべきか、是れ將た一の苦悶なり。

り。苦悶の上の苦悶なり。苦悶を愈すの苦悶なり。苦悶の上又苦悶あり、一の苦悶を愈さんとすれば、生憎に他の苦悶來り、妾や今實に苦悶の合圍の内にあるなり。されば、此書を著すは、素より此苦悶を忘れんとての業には非ず、否筆を執るその事も中々苦悶の種たるなり、一字は一字より、一行は一行より、苦悶は彌々勝るのみ。

苦悶は愈々勝るのみ、されど、妾強ちに之れを忘れんことを願はず、否昔し懷かしの想ひは、其一字に一行に苦惱と共に彌増すなり。懷かしや、吾が苦悶の回顧。

顧へば女性の身の自から揣らず、年少くして民權自由の聲に狂し、行途の蹉跌再三再四、漸く後の半生を家庭に托するを得たりしかど、一家の計未だ成らざるに、身は早く寡となりぬ。人の世のあぢきなさ、しみじみと骨にも透るばかりなり。若し妾のために同情の一掬を注がるゝものあらば、开はまた世の不幸なる人ならずばあらじ。

妾が過ぎ來し方は蹉跌の上の蹉跌なりき。されど妾は常に戦へり、蹉跌の爲めに會て一度も怯みし事なし。過去のみといはず、現在のみといはず、妾が血管に血の流るゝ限りは、未來に於ても妾は尙ほ戦はん。妾が天職は戦にあり、人道の罪惡と戦ふにあり、此天職を自覺すればこそ、回顧の苦悶、苦悶の昔しも懷かしくは思ふなれ。

妾の懺悔、懺悔の苦悶之れを愈すの道は、唯々苦悶にあり。妾が天職によりて、世と己れとの罪惡と戦ふにあり。

先きに政權の獨占を憤ふれる民權自由の叫びに任ぜし妾は、今は赤心資本の獨占に抗して、不幸なる貧者の救済に傾けるなり。妾が烏滸の譏りを忘れて、敢て半生の經歷を極めて卒直に少しく隠す所なく披露せんとするは、強ちに罪滅ぼしの懺悔に代へんとは非ずして、新たに世と己れとに對して、妾の所謂戦ひを宣言せんが爲めなり。

第一家 庭

一 質 ひと の

妾は八九歳の時、屋敷内にて伶俐なる娘と譽めそやさされ、學校の先生達には、活潑なる無邪氣なる子と可愛がられ、十一二歳の時には、縣令學務委員等の臨める試験場にて、特に撰拔せられて十八史略や、日本外史の講義をなし、之れを無上の光榮と喜びつゝ、世に妾ほど伶俐なる者は有るまじなど、心私かに郷黨に誇りたりき。

十五歳にして學校の助教諭を托せられ、三國の給料を受けて子弟を訓導するの任に當り、日々勤務の傍ら、復習を名として、數十人の生徒を自宅に集め、學校の餘科を教授して、生徒をして一年の内二階級の試験を受けることを得せしめしかば、大に父兄の信頼を得て、一時はさき／＼公立學校を凌がんばかりの隆盛を致せり。

學校に通ふ途中、妾は常に鬚髯小僧等の爲めに「マガヒ」が通る「マガヒ」が通ると罵られき。この評言の適切な、今こそ思ひ當りたれ、當時妾は實に「マガヒ」なりしなり。「マガヒ」とは馬爪を隨甲に似たらしめたるにて、現今の護謨を象牙に擬せると同じく似て非なるものなれば、之れを以て妾を呼びしことの如何ばかり名言なりしかを知るべし。今更恥かしき事ながら妾は其頃先生達に活潑の子といはれし如く、起居振舞のお轉變なりしと言ふまでもなく、修業中は髪を結ふ暇だに惜き心地せられて、一向に書を読む事を好みければ、十六歳までは髪を剪りて前部を左右に分け、衣服まで悉く男生の如くに装ひ、加も學校へは女生と伴うて通ひにき。近所の小供等の之を觀て異様の感を抱き、擬こそ男子とも女子ともつかぬ、所謂「マガヒ」が通るよとは罵りしなるべし。之れを懷ふ毎に、今も背に汗のにじむ心地す。やう／＼世心の付き初めて、男裝せし事の恥かしき髪を延ばすに意を用ひたるは翌年十七の春なりけり。此時よりぞ始めて束髮の仲間入りはしたりける。

二 自由民權

十七歳の時は妾に取りて一生忘れがたき年まり来て、日頃兄弟の如く親しみ合へる、葉石久米雄氏（變名）また其説の主張者なりき。氏は國民の團結を造りて、之が總代となり、時の政府に國會開設の請願をなし、諸縣に先づ民衆の迷夢を破らんとはなしぬ。當時母上の戯れに物せし大津繪ふしあり。

すめらみの、お爲めとて、備前岡山を始じめとし、數多の國のますらをが、赤い心を墨で書き、國の重荷を背負ひつゝ、命は輕き旅衣、親や妻子を振り捨てて、〔詩人〕『國を去て京に登る愛國の士、心を痛ましむ國會開設の期』雲や霞も程なく消えて、民權自由に、春の時節がおつゞけ来るわいな。

尋常の大津繪ふしと異なり、人々民權論に狂せる時なりければ、妾の月琴に和して之れを唄ふを喜び、其の演奏を望まるゝ事屢となりき。是より先き十五歳の時より、妾は女の心得なかるべからずとて、茶の湯、生花、裁縫、諸禮、一式を教へられ、尙ほ男子の如く舉動ひし妾を女子らしからしむるには、音楽もて心を和らぐるに若かずとて、八雲琴、月琴などさへ日課の中に据ゑられぬ。されば妾は毎日の修業夫より夫と夜に入るまで殆んど寸暇とてもあらざるなりき。

三 縁 談

十六歳の暮に、或家より結婚の申込ありし父母も困じ果て、或日妾に向ひ、家の生計意の如くならずして、倒産の憂き目さへやがて落ちかゝらん有様なるに、御身とて何時までか父母の家に留り得べき、幸ひの縁談まことに良縁と覺ゆるに、早く思ひ定めよかしと、いと切めたる御言葉なり。其時妾は母に向ひ是までの養育の恩を謝して、擬てその御恵みによりて最早や自活の道を得たれば、假令今より此家を逐はるゝとも、糊口に事を缺くべしとは覺えず。されど願ふは、唯だ此儘に永く膝下に侍せしめ給へ、學校より得る収入は悉く食費として捧げ參らせ聊か困厄の萬

一を補はんと、心より申し出でけるに、父母も動かし難しと見てか、此の縁談は沙汰止みとなりけり。

嗚呼世には斯の如く、父兄に威壓せられて、唯だ儀式的に機械的に、愛もなき男と結婚するものゝ多からんに、如何で是等不幸の婦人をして、獨立自營の道を得せんとは、此時よりぞ妾が胸に深くも刻み付けられたる願ひなりける。

結婚沙汰の止みてより、妾は一層學藝に心を籠め、學校の助教を辭して私塾を設立し、親切懇到に教授しければ、さらぬだに祖先より代々教導を以て任とし來れる吾が家の名は、忽ち近郷にまで傳へられ、入學の者日に増して、間もなく一家は尊敬の煥點となりぬ。依りて或寺を借り受けて教場を開き、夜は更に晝間就學の暇なき婦女、貧家の子弟に教へ、母上は習字を兄上は算術を受持ちて妾を助け、土曜日に討論會、演說會を開きて知識の交換を謀り、舊式の教授法に反對して只管に進歩主義を採りぬ。

四 岸田女史來る

其歲有名なる岸田俊子女史(故中島信行氏夫人)漫遊し來りて、三日間吾が郷に演說會を開きしに聽衆雲の如く會場立錐の地だも餘さばりき。實にや女史がその流暢の辯舌もて、滔々女權擴張の大義を唱道せられし時の如き妾も奮慨おく能はず、女史の滯在中有志家を以て任ずる人の夫人令嬢等に議りて、女子懇親會を組織し、諸國に率先して、婦人の團結を謀り、屢々志士論客を請じては天賦人權自由平等の説を聴き、をさく女子古來の陋習を破らん事を務めしに、風潮の向ふ所入會者引きも切らず、會はいよく盛大に起きぬ。

五 納涼會

同じ年の夏、自由黨員の納涼會を朝日川を交渉し來りければ、元老女史竹内、津下の兩女史と謀りて之れに應じ、同日夕刻より船を朝日川に泛ぶ。會員樂器に和して、自由の歌を合奏す、悲壯の音水を渡りて、無限の感に打れしことの今も尙ほこの記憶に残れるよ。折しも向ひの船に聲こそあれ、自由黨員の

一人、甲板の上に立ち上りて演說をなせるなり。殺氣凛烈人をして慄然たらしむ。市中ならんには警察官の中止解散を受くる際ならんに、水上是れ無政府の心易きは何人の妨害もなくて、興に乗せる演說の續々として試みられ、悲壯激越の感、今や朝日川を領せる此時、突然として水中に人あり、海坊主の如く現はれて、會に中止解散を命じぬ。圖らざりきこの船遊びを胡亂に思ひ、恐るべき警官が、水に潜みて其の舉動を伺ひ居たらんとは。船中の人々は今を興闋の時なりければ、河童を殺せ、なぐり殺せと鉦めき合ひ、荒立ししが、長者の言に従ひて、皆々穩かに解散し、大事に至らざりしこそ幸ひなれ。されど妾の學校はその翌日時の縣令高崎某より、「詮議の次第有之停止候事」との命を蒙りたり。詮議の次第とは何事ぞ、其筋に向ひて詰問する所ありしかど何故か答へなければ、妾の姉婿某が縣會議員常置委員たりしに頼りて其故を尋ねしめけるに、理由は妾が自由黨員と船遊びを共にしたりと云ふにありて、姉婿さへ譴責を加へられ、暫らく謹慎を表する身の上とはなりぬ。

第二上 京

一 故郷を捨つ

政府が人權を蹂躪し、抑壓を逞ふして憚か先輩の説く處、洵にその所以ありけるよ。斯る私政に服従するの義務何處にかあらん、此身は女子なれども、如何でこの弊制惡法を除かずして止むべきやと、妾は怒りに怒り、過りに過りて、一念また生徒の訓導に意なく、早く東都に出て、有志の士に謀らばやとて、其機を熟するを待てる折しも、妾の家を距る三里斗りなる親友山田小竹女の許より、明日村に祭禮あり、遊びに來まさずやと、切なる招待の狀來れり。そのまゝ東都に奔らんといと序でよしと思ひければ、心には血を吐くばかり憂かりしを忍びつゝ、姉上をも誘ひて、祖先の墓を拜せんことを母上に勧め、親子三人引き連れて約一里斗りの寺に詣で、暫く默禱して妾が志を祖先に告げぬ。初秋のいと爽

かに晴れたる日なりき。生れて十七年の住みなれし家に背き、恩愛厚き父母の膝下を離れんとする苦しさは、偲ぶとすれど胸に餘りて、外貌にや表はれけん、歸るさの途上も、母上は妾の舉動を怪しみて、察する所今度の學校停止に不満を抱き、此機を幸ひに遊學を試みんとは非ずや、父上の御許こそなけれ母は御身を片田舎の埋木となすを惜しむ者、如何で折角の志しを沮むべき、安んじて仔細を語れよと、左りとは慈愛深き御仰せかな。されど妾は答へざりき、そは母上より父上に語り給はゞ到底御許容なきを知らばなり。かくて先づ志士仁人に謀りて學資の補助を乞ひ、然る上にて遊學の途に上らばやと思定め、當時自由黨中慈善の聞え高かりし大和の豪農土倉庄三郎氏に懇願せんとて、先づ其地を志し密かに出立の用意をなす程に、自由黨解黨の議起り、板垣伯を始めとして、當時名を得たる人々ども、何れも下阪し、土倉庄三郎氏も亦大阪に出でしとの事に、好機逸すべからずとて、遂に母上までも欺き參らせ、親友の招きに應ずと言ひ繕ろひて、一週間斗りの暇を乞ひ、翌日家の軒端を立出でぬ。實に明治十七年の初秋なりき。

二 板垣伯に謁す

友人の家に著くより、翌日の大阪行きの船の時刻を問ひ合せ、午後七時頃とあるに、今更ながら胸騒がしぬ。されど兼ての決心なり、明くれば友人の懇ろに引き止むるをも聽かず、暇乞ひして大阪に向ひぬ。然るに妾と室を同ふせる四十斗りの男子ありて、頻りに妾の生地を尋ねつゝ、此方の顔のみ注視する體なるに、妾は心安からず、或は兩親よりの依託を受けて途中爰に妾を待てるには非る乎と、一旦は少なからず危ぶめるものから、もと妾の郷を出づるは不束ながら日頃の志望を遂げんとてなり、彼の増を越えて奔るなどの猥りがましき類ならねば、將た何をか包み秘さんとて、頓て東上の途中大阪の親戚に立ち寄らんと意を決しけるに、さらば其親戚は誰れ町名番地は如何になど、執拗ねく問はるゝことの蒼蠅くて、口に出づるまゝ、有らぬことを答へけるに、其人大に驚きたる様子にて、さては藤井氏の

親戚なりし乎、奇遇と云ふも愚かなるべし、藤井氏は今し此室に在りしかど、事務員に用事ありとて、先刻出で行かれたり、いでや直ちに呼び來らんとて、倉皇起て事務室に至り藤井をば呼べるなるべし。藤井は妾の何人なるかを問ひ究むる暇もなく、其人に牽れて來り見れば、何ぞ圖らん從妹の妾なりけるに、更に思ひ寄らぬ體にて、何故の東上にや、兩親には許可を得たりやなど、疊みかけて問ひ出でぬ。固より承諾を得たりとは、其場合吾れと心を欺ける答へなりしが、果ては質問の箭の堪へがたなく、最とゞ苦しき胸を押へ額を擦りて、眩暈に托言せ、委しくは何れ上陸のうへと、其儘横になりて、翌朝九時漸う大阪に着けば、藤井の宅の妻子及び番頭小僧等まで、主人の歸宅を歡び迎へ、而かも妾の新來を訝しうも思へるなるべし。その夕妾は遂に藤井夫婦に打ち明けて東上の理由を語りぬ。妻は深く同情を寄せ呉れたり、藤井も共に盡力せんと誓ひぬ。その翌日直ちに土倉氏を銀水樓に訪れけるに、氏はいまだ出版し届らざりき、妾の失望いかばかりぞや。されど別に詮議もなく、只管其到着を待ちたりしに、葉石久米雄氏より招待狀來り板垣伯に紹介せんとぞいふなる、いと嬉しくて、直ちに其寓所に訪れしに、葉石氏は妾が出版の理由を知らず、婦女の身として一時の感情に一身を誤り給ふなど、懇ろなる教訓を垂れ給ひき。されど妾の一念翻へすべくもあらずと見てか、強て言はず、兎角は板垣伯に會ひ東上の趣意を陳べよとあるに、妾は諾ひて遂に伯に謁し、東上の趣意さては將來の目的など申し聞えたるに、大に同情を寄せられつゝ、土倉氏出版せば吾よりも頼みて御身が東上の意思を貫徹せしめん、幸ひに邦家のため、人道のために勉めよとの御言葉なり。世にも有難くて感涙に咽べるその日、圖らざりき土倉氏より招狀の來らんとは。そは友人板垣伯より貴嬢の志望を聞きて感服せり、不肖ながら學資を供せんとの意味を含みし書翰にてありしかば、天にも昇る心地して從弟にも此喜びを分ち、且つは郷里の父母に遊學の許可を請はしめんとて急ぎ其旨を申送り、倉皇土倉氏の寓所に到りて、其恩恵に

浴するの謝辭を陳べ、旅費として五十金を贈られぬ。かくて用意も全く成りつ、一向に東上の日を待つ程に郷里にては従弟よりの消息を得て、一度は大に驚きしかど、斯る人々の厚意に依りて學資をさへ給せらるゝの幸福を無視するは勿體なしとて、終に公然東上の希望を容れたるは、誠に板垣伯と土倉氏との恩恵なりかし。

三 書窓の警報

夫より數日を経て、板垣よりの來狀あり、

東京に歸る有志家のあるを幸ひ、御身と同伴の事を頼置きたり、直ぐに來よ紹介せんとの事に、取敢へず行きて見れば、有志家とは當時自由黨の幹事たりし佐藤貞幹氏にてありければ、妾はいよく安心して、翌日神戸出帆の船に同乗し、船の初旅も恙なく將た横濱よりの汽車の初旅も障りなく東京に着いて、兼ねて板垣より依頼なし置くとの事なりし自由燈新聞記者坂崎斌氏の宅に至り、初對面の挨拶を述べて、將來の訓導を頼み聞え、やがて築地なる新榮女學校に入學して十二三歳の少女と肩を並べつつ、只管に英學を修め、傍ら坂崎氏に就きて心理學及びスペンサー氏社會哲學の講義を聴き、一念讀書界の人とはなりぬ。かゝりし程に、一日朝鮮變亂に引き續きて、日清の談判開始せられたりとの報、端なく妾の書窓を驚かしぬ。我が當局の軟弱無氣力にして、内は民衆を抑壓するにも係はらず、外に對しては卑屈はれ事とし、國家の恥辱を貽して、偏に一時の榮華を衒ひ、百年の患を遺して、唯だ一身の苟安を冀ふに汲々たる有様を見ては、いと感情にのみ奔るの癖ある妾は、憤慨の念然ゆるばかり、遂に巾幗の身をも打忘れて、いかで吾れ奮ひ起ち、優柔なる當局及び憎民の眠を覺し呉れでは已むまじの心となりしこそ端なき限りなりしか。

四 當時の所感

嗚呼斯の如くにして妾は斷然書を擲つての不幸を來せるなりけり。當時妾の感情を洩せる

一片の文あり、素より狂者の言に近けれども、當時妾が國權主義に心酔し、忠君愛國てふ事に熱中したりし其有様を知るに足るものあれば、敘事の順序として、左に拔萃することを許し給へ。斯は大

阪末決監獄入監中に起草せるものなりき。妾は茲に自白す、妾は今貴族豪商の驕傲を憂ふると共に、又昔時死生を共にせし自由黨有志者の墮落輕薄を厭へり。我等女子の身なりとも、國のためてふ念は死に抵るまでも已まざるべく、此の一念は、やがて妾を導きて、頻りに社會主義者の説を聴くを喜ばしめ、漸く彼の私欲私利に汲々たる帝國主義者の云爲を厭はしめぬ。

嗚呼學識なくして、徒らに感情にのみ支配せられし當時の思想の誤れりしことよ。されど其頃の妾は憂世愛國の女志士として、人も容されき、妾も許しき。姑らく女志士として語らしめよ。

獄中述懷

(明治十八年十二月十九日大坂未決監獄に於て、時に十九歲)

元來僕は我國民權の擴張せず、從て婦女が古來の陋習に慣れ、卑々屈々男子の奴隸たるを甘んじ、天賦自由の權利あるを知らず己れがために如何なる弊制惡法あるも恬として意に介せず、一身の小樂に安んじ錦衣玉食するを以て、人生最大の幸福名譽となす而已。豈事體の何物たるを知らんや、況んや邦家の休戚をや。未だ曾て念頭に懸けざるは、滔々たる日本婦女皆是にして、恰も度外物の如く自ら卑屈し、政事に關する事は女子の知らざる事となし一も顧慮するの意なし。斯く婦女の無氣無力なるも、偏へに女子教育の不完全、且つ民權の擴張せざるより自然女子にも關係を及ぼす故なれば、僕は同情同感の民權擴張家と相結託し、愈々自由民權を擴張する事に従事せんと決意せり、是れ固より僕が希望目的にして、女權擴張し男女同等の地位に至れば、三千七百萬の同胞姉妹皆競ひて國政に參し、決して國の危急を餘所に見るなく、己れのために設けたる弊制惡法を除去し、男子と共に文化を誘ひ、能く事體に通ずる時は、愛國の情も、愈々切なるに至らんと欲すればなり。然るに現今我國の狀態たるや、人民皆不平等なる、專制の政體を厭忌し、公平無私なる、立憲の政體を希望し、新紙上に掲載し、或は演説に或は政府に請願して、日々專制政治の

不可にして、日本人に適せざる事を注告し、早く立憲の政體を立て、人民をして政に參せしめざる時は、憂國の餘情溢れて、如何なる舉動なきにしも非ずと、種々當路者に向つて忠告するも、馬耳東風たる而已ならず憂國の志士仁人が、誤つて法網に觸れしを、無情にも長く獄窓に呻吟せしむる等、現政府の人民に對し、抑壓なる舉動は、實に枚擧に遑あらず、就中儂の、最も感情を惹起せしは、新聞、集會、言論の條例を設け、天賦の三大自由權を剝奪し、剩さへ儂等の生來會て聞ざる諸説を謀せし事なり。而して亦布告書等に奉勅云々の語を付し、畏れ多くも、天皇陛下に罪狀を附せんとするは、抑も亦何事ぞや。儂は是を思ふ毎に苦悶懊惱の餘り、暫し數行の血淚滾々たるを覺え、寒からざるに、肌粟粒を覺ゆる事數となり。須臾にして、惟らく嗚呼此の如くなる時は、無智無識の人民諸稅收歛の酷なるを怨み、如何の感を惹起せん、恐るべくも、積怨の餘情溢れて終に慘酷比類なき佛國革命の際の如く、或は露國虛無黨の謀圖する如き、慘憤悲愴の舉なきにしも非ずと。因て儂等同感の志士は、是を未萌に削除せざるを得ずと、即ち曩日に政府に向つて忠告したる所以なり。斯く儂等同感の志士より、現政府に向つて忠告するは、固より現當路者の舊蹟あるを思へばなり。然るに今や採用するなく、却て儂等の眞意に悖り、剩さへ日清談判の如く、國辱を受ける等の事ある上は、最早や當路者を顧るの違なし、我國の危急を如何せんといふ、益々政府の改良に熱心したる所以なり。儂熟々考ふるに、今や外交に開け、表に相親睦するの狀態なりと雖も、腹中各々針を蓄へ、優勝劣敗、弱肉強食、日々に驚強の欲を逞ふし、頻り東洋を蠶食するの兆あり、而して、内我國外交の狀態につき、近く儂の感ずる處を舉れば、曩日に朝鮮變亂よりして、日清の關係となり、其談判は果して、儂等人民を満足せしむる結果を得しや。加之、此時に際し、外國の注目する所たるや、火を見るよりも明けし。然るに其結果たる不充分にして、外國人も私かに日本政

府の微弱無氣力なるを嘆ぜしとか聞く。儂思ふて爰に至れば、血淚淋漓、鐵腸寸斷、石心分裂の思ひ、愛國の情、轉た切なるを覺ゆ。嗚呼日本に義士なき乎、嗚呼此國辱を雪がんと欲するの烈士、三千七百萬中一人も非ざる乎、條約改正なき、亦宜なる故と、内を思ひ、外を想うて、非哀轉軀、懊惱に堪へず。嗚呼如何して可ならん、假令ひ女子たりと雖も、固より日本人なり、此國辱を雪がずんばあるべからずと、獨り愁然、苦悶に沈みたりき。何となれば、他に謀るの女子なく、且つ小林等は、此際何か計畫する様子なるも、儂は出京中他に志望する所ありて、暫らく一心に英學に従事し居たりしを以て、曾て小林とは互に主義上、相敬愛せるにも關はらず、儂は修業中なるを以て、小林の寓所を訪ふ事も甚だ稀なりしを以て、其計畫する事件も、求めて其頃聞かざりしが、儂は日清談判の時に至り、大に感ずる所あり、奮然書を擲ちたり。亦小林は豫ての持論に、假令ひ如何に親密なる間柄たるも、決して、人の意を枉げしめて、己れの説に服従せしむるは、我の好まざる所、況んや吾々計畫する處の事は、皆身命に關する事なるに於てをや、吾は意氣相投する處の事は、初めて滿腔の思想を、陳述する者なりと、何事に於ては、總て斯の如くなりし。然るに、忽ち朝鮮一件より日清の關係となるや、儂は曩日に述し如く、我國の安危旦夕に迫れり、豈讀書の時ならんやと、奮然書を擲ち、先づ小林の處に至り、此際如何の計畫あるやを問ふ。然れども答へず。因て儂は、或は書にし、或は百方言を盡して、數々其心事を陳述せしゆへ、稍や感ずる所ありけん、漸く、今回事件の計畫中、其端緒を開くを得たり。其端緒とは他に非ず、即ち今回日清爭端を開かば、此舉に乗じ、平常の素志を果さんの心意なり。而して、其計畫は既に成りたりと雖も、一金額の乏しきを憂ふる而已との言に儂は大に感奮する所あり、如何にもして、幾分の金を調べ、彼等の意志を貫徹せしめんと、即ち不恤縞會社を設立するを名とし、相模地方に遊説し、漸く少數の金を

調へたり。然りと雖も、是を以て今回計畫中の費用に充つる能はず、只有志士の奔走貴位に充つる程なりしゆゑ、儂は種々碎心粉骨すと雖も、悲しい哉、處女の身、如何ぞ大金を投ずる者あらんや。況んや此重要件は、少しも露發を恐れ告ざるをや、皆徒勞に屬せり。因て思ふに、到底儂の如きは、金員を以て、男子の萬分の一助たらんと欲するも難しと、金策の事は全く斷念し、身を以て當らんものをと、種々其手段を謀れり。然る處、偶々日清も平和に談判調ひたりとの報あり。此報たる實に儂等の爲めに頗る凶報なるを以て、稍や失望すといへども、何ぞ中途にして廢せん、猶一層の困難を來すも、精神一到何事か成らざらん。且つ當時の風潮、日々朝野を論ぜず、一般に開戰論を主張し、其勢力實に盛んなりしに、一朝平和に其局を結びしを以て、其腦裏に徹底する所の感情は大に儂等の爲めに奇貨なるなからん乎、此期失ふべからずと、即ち新たに策を立て、決死の壯士を擇び、先づ朝鮮に至り事を擧げしむるに如かずと、是に於て檄文を造り、これを飛ばして、國人中に同志を得、共に合力して、辦髮奴を國外に放逐し、朝鮮をして純然たる獨立國とならしむる時は、諸外國の見る處も、曩日に政府は卑屈無氣力にして、彼の辦髮奴のために辱を受けしも、民間には義士烈婦ありて、國辱をそゞりたりとて、大に外交政略に關する而已ならず、一は以て内政府を改良するの好手段たり、一舉兩得の策なり、愈々速かに此舉あらん事を渴望し、且つ種々心膽を碎くと雖も、同じく金額の乏しきを以て、其計畫成ると雖も、未だ發する能はず。大井小林等は、只管金策にのみ、從事し居たりしが、當地に於ては最早や目的なして、兩人は地方を遊説なすとて出で行けり。暫らくして、大井は中途にして歸京し、小林獨り止まりしが、漸く其盡力により、金額成就せしを以て、愈々磯山等は渡行の事に決定し、其發足前に當り、磯山儂に告ぐに、朝鮮に同行せん事を以てす。因て儂は、其必用の在る處を問ふ。磯山告ぐるに、彼是間の通信者に、最も必用な

るを答ふ。儂熟慮是を諒す。最も儂は、曩日に東京を出立するの時、矢張り、磯山の依頼により、火藥を運搬するの約ありて、長崎まで至るの都合なりしが、其義務終りなば、歸京して、第二の策、即ち内地にて、相當の運動を爲さんと希圖したりしが、當地（大阪）にて亦朝鮮へ通信の爲め同行せんとするに、小林は是に同意したれば、即ち渡航に決心せり。然るに、磯山は、彌々出立と云ふ其前日逃奔し、更に其潛所を知る能はず。故を以て已むなく新井代りて其任に當り、行く事に決せしかば、彼も亦同じく、儂に同行せん事を以てす。儂既に決心せし時なれば、直ちに之を諾し、大井小林と分袂し、新井と共に渡航の途に就き、崎陽に至り、仁川行の出帆を待ち合はせ居たり。然る所滞留中、磯山逃奔一件に就き、新井代るに及び、壯士間に紛紜を生じ、渡航を拒むの壯士もある様子ゆゑ、儂は憂慮に堪へず、彼等に向ひ、間接に公私の區別を説きしも、悲しいかな、公私を顧るの慮なく、許容せざるを以て、儂は大に奮激する所あり、未だ同志の人に語らざるも、斷然決死の覺悟をなしたりけり。其際儂は新井に向ひ云ふ様、儂此地に到着するや否や壯士の心中を窺ふに、堂々たる男子にして、私情を挟み、公事を抛たんとするの意あり、而して君の代任を思むの風あり、誠に邦家のために歎ずべき次第なり。然れども、是等の壯士は、却て内地に止まる方好手段ならんと云ひしに、新井是に答へて、成程然る乎、斯の如き人あらば、即ち歸らしむべし、何ぞ多人數を要せん。吾が諸君に對するの義務は、畢竟一身を抛擲して、内地に止まる人に好手段に與ふるの犧牲たるのみなれば、決死の壯士少數にて足れり、何ぞ公私を顧ざる如きの人を要せんやと。儂此言に感じ、嗚呼此人國のために、一身の名譽を顧みず、内事は總て大井小林の任する所なれば、敢て關せず、我は尙其義務責任を盡すのみと、自ら奮て犧牲たらんと欲するは、眞に志士の天職を、全ふする者と、暫し讚嘆の念に打たれしが、儂もまた、此行決死せざれば、到底充分平常希望す

る處の目的を達する能はず。且つ儂今回の同行、偏に通信員に止まると雖も、内事は大井小林の兩志士ありて、充分の運動をなさん。儂今假令ひ異國の鬼となるも、事幸ひに成就せば、儂平常の素志も、彼等同志の擴張する處ならん。まづ是に就ての手段に盡力し、彼等に好都合を得せしむるに如かずと。即ち新井を助けて、此手段の好結果を得せしめん、且つ夫につきては、決死の覺悟なかるべからず、然れども、儂、女子の身腕力あらざれば、頼む所は萬人に敵する良器、即ち爆發物の有るあり。假令ひ身體は軟弱なりと雖も、愛國の熱情を以て向ふときは、何ぞ壯士に譲らんや。且つ惟へらく、儂は固より無智無識なり、然るに今回の行は、實に大任にして、内は政府の改良を圖るの手段に當り、外は以て外交政略に關し、身命を抛擲するの榮を受く、嗚呼何ぞ萬死を惜まんやと、決意する所あり。即ち崎陽に於て、小林に贈るの書中に、假令ひ國土を異にするも、共に國のため、道のために盡し、輓近東洋に、自由の新境域を勃興せんと、暗に永別の書を贈りし所以なり。嗚呼儂や親愛なる慈父母あり、人間の深情親子を棄て、亦何かあらんや。然れども是れ私事なり、儂一女子なりと雖も、豈公私を混同せんや。斯く重んずべく貴ぶべき身命を抛擲して、敢て犠牲たらんと欲せしや、他なし、愛國の一心あるのみ。然れども、悲しいかな、中途にして發露し、儂が本意を達する能はず。空しく獄裏に呻吟するの不幸に遭遇し、國の安危を餘所に見る悲しさを、儂固より愛國の丹心萬死を輕んず、永く牢獄にあるも、敢て怨むの意なしと雖も、帝國恩に報酬する能はずして、過ぐるに忍びざるをや。嗚呼是を思ひ、彼を想うて、轉た潜然たるのみ。嗚呼何れの日か儂が素志を達するを得ん、只儂是を怨むのみ、是を悲しむのみ、噫。

明治十八年十二月十九日大阪警察本署に於て

大阪府警部補 廣澤 鐵郎 印

斯く冗長なる述懷書を獄吏に呈して、廻らぬ筆に仕たり類したりける當時の振舞のはしたなさよ。理性なくして一片の感情に奔る青春の人々は、されくも妾に觀て、警むる所あれかし、と願ふも亦端たなしや。されくも當時の境遇の單純にして幼なかりしは、飽まで浮世の浪に弄ばれて、深くく不遇の淵底に沈み、果ては運命の測るべからざる恨みに泣きて、煩悶遂に死の安慰を得べく覺悟したりし其後の妾に比して、人格の上の差異如何ばかりぞや、思ふて爰に至る毎に、そよるに懷舊の涙の禁め難きを奈何せん。斯く妙齡の身を以て、一念自由のため、愛國のために、一命を抛たんとしたりしは、一は名譽の念に驅られたる結果とは云へ、亦心の底よりして、自由の大義を國民に知らしめんと願ふてなりき。當時拙作あり、愛國丹心萬死輕、劍華彈雨亦何驚、誰言巾幗不成事、曾記神功赫赫名。

五 不恤緯會社

是より先き妾は坂崎氏の家にありて、一心勉學の傍ら、何とかして同志の婦女を養成せんものと志ざし、不恤緯會社なるものを起して、婦人に獨立自營の道を教へ、男子の奴隸たらしめずして、自由に婦女の天職を盡さしめ、此感化によりて、男子の暴横卑劣を救済せんと欲したりしかば、富井於菟女史と謀りて、地方有志の贊助を得、資金も現に募集の途つきて、行くくは一大團結を組織するの望みありき。然るに事は志しと齟齬して、富井女史は故郷に歸るの不幸に遇へり。序に女史の履歷を述べて見ん。

六 於菟女史

富井於菟女史は播州龍野の人、醬油屋に生れ、一人の兄と一人の妹とあり。幼より學問を好みしかば、商家には要なしと思ひながらも、母なる人の丹精して同所の中學校に入れ、やがて業を卒へて後、其地の碩儒に就て漢學を修め、又岸田俊子女史の名を聞きて、一度その家の學婢たりしかど、同女史より漢學の益を受くる能はざるを知ると共に、女史が中島信行氏と結婚の約成りし際なりしかば、暫時にして其家を辭

し坂崎氏の門に入りて、繪入自由燈新聞社の校正を擔當し、獨立の歩調を取られき。我國の女子にして新聞社員たりしは、實に於菟女史を以て嚆矢とすべし。斯くて女史は給料の餘りを以て同志の婦女を助け、共に坂崎氏の家に同居して學事に勉めしめ、自から訓導の任に當りぬ。妾の坂崎氏を訪ふや、女史と相見て舊知の感あり、遂に姉妹の約をなし生涯相助けんことを誓ひつゝ、萬祕密を厭ひ善惡ともに互に相語らふを常とせり。左れば妾は朝鮮變亂よりして、東亞の風雲益々急なるよしを告げ、此時此際、婦人の身また如何で空しく過すべきやといひけるに、女史も我當局者の優柔不斷を慨き、心私かに決する處あり、いざさらば地方に遊説して、國民の元氣を興さんとて、坂崎氏には一片の謝狀を遺して、妾と共に神奈川地方に奔りぬ。實に明治十八年の春なり。兩人神奈川縣荻野町に着し、其地の有志荻野氏及び天野氏の盡力によりて、同志を集め、結局釀金して重井(變名)葉石等志士の運動を助けんと企てししかど、其額餘りに少なかりしかば、女史は落膽して、此上は郷里の兄上を説き若干を出金せしめんとて、唯一人歸郷の途に就きぬ、旅費は兩人の衣類を典して調へしなりけり。

七 髮結洗濯

女史と相別れし後、妾は土倉氏の學資を受くるの資格なきことを自覺し、職業に貴賤なし、均しく皆神聖なり、身には襤褸を纏ふとも心に錦の美を飾りつゝ、始らく自活の道を立て、やがて霹靂一聲、世を轟かす事業を遂げて見せばやと、或時は髮結となり、或時は洗濯屋、又或時は仕立物屋ともなりぬ。廣き都に知る人なき心易さは、中々に自活の業の苦しくも亦た樂しかりしぞや。斯くて三旬半りも過ぎぬれど、女史よりの消息なし。奴は人の心の頼めなきことよなど案じ煩らひつつ、居て待たんよりは、寧ろ行て見るに若かずと、之を葉石氏に譲りしに、心變りならば行くも詮なし、さなくば居るも消息のなからんやといふ。實にさなりと思ひければ、餘儀なくも其言葉に従ひ、又幾日をか過ぎぬる或日、鉛筆もてそこはかと認めたる一封の書は

來りぬ。見れば怨めしくも戀しかりし女史よりの手紙なり。冒頭に「ア、しくじつたり誤りたり取餅桶に陥りたり今日最早や曩日の富井にあらず妹は一死以て君に謝せざんばあらず今日の悲境は筆紙の能く盡す處にあらず只々二階の一隅に推しこめられて日々爲す事もなく戀しき東の空を眺め悲哀に胸を焦すのみ餘は記する能はず幸ひに諒せよ」とあり。言は簡なれども、事情の大方は推せられつ。扱て何とか救済の道もがなと千々に心を碎きけれども、其術なし。さらば已れ女史の代りをも兼ねて、二倍の働きをなし、此本意を貫かんのみとて、恰も郷里より慕ひ來りける門弟のありしを對手として日々髮結洗濯の業をいそしみ、僅かに糊口を凌ぎつゝ、有志の間に運動して大にそが信用を得たりき。

八 曉夢を破る

然るに其年の九月初旬妾が一室を借り受け呼びて、景山さん景山さんといひ慌たし。曉の夢の未だ覺めやらぬ程なりければ、何事ぞと半ばは現の中に問ひ反せしに、女のお客さんがありますといふ。何んと云ふ方ぞと重ねて問へば富井さんと仰有いますと答ふ。何に富井さん！妾は床を蹴りて飛び起きたるなり。階段を奔り下るも夢心地なりしが、庭に立てるはヲ、其人なり。富井さんかと、吾を忘れて抱きつき、暫しは無言の涙なりき。懷かしき女史は、幾日の間をか着のみ着のままに過しけん、秋の初じめの熱苦しき空を、汗臭く無下に汚れたる浴衣を着して、妙齡の處女の流石に人目羞かしげなる風情にて、茫然と庭に佇めるなりけり。さてあるべきに非れば、二階に扶上げて先づ無事を祝し、別れし後の事ども何にくれと尋ねしに、女史は涙ながらに語り出づるやう、御身に別れてより、無事郷里に着き、母上兄妹の恙なきを喜びて、扱て時ならぬ歸省の理由斯々と述べるに、兄は最と感じ入りたる體にて始終耳を傾け居たり。その様子に胸先づ安く、遂に調金の事を申出でしに、圖らざりき感嘆の體と見えしは妾の膽太さを呆れたる顔ならんとは。妾の再び三たび頼み聞えしには答へずして、

徐かに沈みたる底氣味わるき調子もて、斯る大それたる事に加擔する上は、當地の警察署に告訴して大難を未萌に防がずばなるまじといふ。妾は驚きつゝ又た腹立しさの遺瀾なく、骨肉の兄と思へばこそ斯く大事を打明けしなるに、卑怯にも警察に告訴して有志の士を傷けんとは、何たる怖ろしき人非人ぞ、最早や人道の大義を説く必要なし、唯一死以て諸氏に謝する而已と覺悟しつゝ、兄に向ひて斯ばかりの大事に與せしは全く妾の心得違ひなりき、今こそ御論によりて悔悟したれ、以後は仰せの儘に従ふべければ、何卒誓ひし諸氏の面目を立てしめ給へ、と種々に哀願して僅かにその承諾は得てしかど、妾は夫より二階の一室に閉ぢ籠めの身となり、妹は看守の役を仰付かりつ。筆も紙も與へられねば書を読むさへも許されず、其悲しさは死にも優りて、御身の無や待つらんと思ふ心は、中々待つ身に幾倍の苦しさなりけん。漸く妹を嫌して、鉛筆と半紙を借り受け急ぎ消息はなしけるも、委しき有様を書き記すべき暇もなかりき。定めて心變りよと爪弾きせらるゝならんと口惜しさ悲しさに胸は張り裂くる思ひにて、夜もおち／＼眠られず。何卒して今一度東上し、此胸の苦痛を語りて徐ろに身の振り方を定めんものと今度漸く出奔の期を得たるなり。そは兩三日前妹が中元の祝ひにと、他より四五圓の金をもらひしを無理に借り受け、そを路費として、夜半寢巻のまゝに家を脱け出で、是より耶穌教に身を委ね神に事へて妾が志を貫かんとの手紙を残して、かくは上京したるなれば、妾は最早同志の者にあらず、約に背くの不義を咎むることなく長く交誼を許してよといふ。その情義の篤き志を知りては、妾も如何で感泣の涙を禁じ得べき。ア、堂々たる男子にして黄金のために其心身を賣り恬として顧みざるの時に當り、女史の高徳義心一身を犠牲として兄に祕密を守らしめ、自らは道を變へつゝも尚ほ人のため國のために盡きんとは、何たる清き心地ぞや。妾が敬慕の念はいと深くなりゆきたるなり。其日は終日女梁山泊を以て任ずる妾の寓所にて種々と話し話され、日の暮るゝも覺ええざりしが、別れに臨みてお互

に盡す道は異なれども、必らず初志を貫きて早晚自由の新天地に握手せんと言ひ交はし、又の會合を約して左らばとはかり袂を分かぬア、是れぞ永久の別れとならんとは神ならぬ身の知る由なかりき。

第三 渡韓の計畫

一 妾の任務

或日同志なる石塚重平氏來り、渡韓の準備其理由及びそれに就ての方法等を説き明かされぬ。固より信ずる所に捧げたる身の如何でかは躊躇ふべき、直ちに其用意に取りかへけるに、彼の友愛の心厚き中田光子は、妾の常ならぬ舉動を察して其仔細を知りたげなる模様なりき。左れど彼女に禍を及ぼさん本意なしと思ひければ、石塚重平氏に托して彼に勉學を勧めさせ、又於菟女史に書を送りて今回の渡航を告げ、後事を托し、是にて思ひ残す事なしと、心靜かに渡韓の途に上りけるは、明治十八年の十月なり。

二 靴の爆發物

同伴者は新井章吾稻垣示の兩氏なりしが、壯士連の中には、三々五々赤毛布にくるまりつゝ船中に寢轉ぶ者あるを見たりき。同伴者は皆互に見知らぬ風を装へるなり、其退屈さと心配さとは中々筆紙に盡し難し。妾が此行に加はりしは、爆發物の運搬に際し、婦人の携帯品として、他の注目を避くることに決したるより、乃ち妾をして携帯の任に當らしめたるなり。斯て妾は爆發物の原料たる藥品悉皆を磯山の手より受取り、支那靴に入れて普通の手荷物如くに装ひ、始終傍らに置きければ、安藤久次郎氏の宅にて同志の人を呼び寄かに包み替へんとする程に、金硫黃と云ふ薬の少し濕りたるを發見せしかば、鑑より取り出して、暫し乾さんとせしに、空氣に觸るゝや否や、一面に青き火となり、今や大事に至らんとせしを、安藤氏來りて、直ちに消し止めたり、追がは多年藥劑を研究し藥劑師の免狀を得て、其當時